

いまどきの林家

木材価格の低迷とそれに伴う林業の停滞が続いている中で、今、森林を所有している方々はどのような考えを持っておられるのかについて、その一端をかいま見ることができる調査が行われましたので紹介させていただきます。

この調査は、昨年(平成18年)8月から9月にかけて、林務課と当森林研究センターが共同で行ったもので、森林組合員を中心にアンケート用紙に回答してもらった形で実施されました。約2600人にアンケート用紙をお配りして、629人から回答がありました。調査の方法から、回答を寄せてくださった方々は、森林所有者の中でも森林への関心が高い方々だと推察されます。

因みに、回答者のプロフィールは、男性が94%、70歳以上41%、60代26%、50代23%で、50代以上が90%を占めます。所有森林面積は5ha未満が72%、それ以上が25%となっており、高齢、男性、小規模という状況です。

さて、回答から伺える森林所有者の意識と行動ですが、ここ1年程度の間(平成17年)に森林を見に行った人は58%、1年以上見に行ったことがない人は33%、行ったことがない人が8%となっており、アンケートに回答した人でも半数弱が自分の山をあまり見に行っていないという結果です。

ところで、森林整備ですが、自家労働55%、親戚等4%、森林組合4%、その他3%という実施状況で、整備していないが33%でした。この結果からは、森林を見に行くということは、イコール森林の整備を行うため、森林の管理に熱心な所有者は高齢にもかかわらず自らの手で整備作業を行っているという行動パターンが読み取れます。

一方、森林整備の担い手として期待されている森林組合への委託が少ない理由について聞いたところ、自分で整備したい70%、委託する余

裕がない30%、その他の理由27%(以上複数回答)となっており、意識の上でも自分の山は自分で整備するという考えが強いことが伺えます。

そこで、自家労働で整備している人の作業頻度について聞いたところ、10日以内44%、11日から1か月26%、1か月以上18%という状況でした。さらに、自分の森林の整備状況は、という問に対して、行われている18%、一部行われている30%、ほとんど又は全く行われていない43%という回答で、自力で森林整備を行っているものの十分ではないと考えている人がかなり多いという結果になっています。このギャップを解消し、十分な森林整備がなされるような方策を講じていくことが必要と考えられます。

折しも、今年はいわゆる2007年問題のスタート年に当たり、今年から団塊の世代が続々と定年を迎えます。確かに、多くの産業部門にとっては負の要因として対策が必要な問題ですが、森林・林業にとっては十分な活動ができていない森林整備部門への新規参入が期待できるチャンスであると考えられます。この機会を森林所有者における管理のバトンタッチあるいは作業人員の充実、森林組合の作業班の充実とそれに伴う森林組合への委託の推進など、森林・林業の活性化につなげていきたいものだと思います。

最後に、森林はみんなの財産という考え方について、賛成とやや賛成を合わせると57%、反対とやや反対を合わせて7%という回答になっています。これを見ると、森林に関心の高い所有者においても、森林の公共性への認識が高まっていることが伺え、今後の施策を考える上で考慮すべき結果であると思いました。

なお、この調査の詳しい内容については、平成18年度の当センターの試験成果発表会で報告がなされました。(センター長 竹内 進)

拡大するスギカミキリの被害

戦後の復興期に全国の山林にはスギが積極的に植栽され、千葉県においても多くのスギ林が見られるようになりました。良質の木材を収穫するにはスギの生育に従って枝打ちや除間伐等の保育を実施しなければなりません。その後の人件費の高騰と木材価格の低迷等によって、管理の行き届かないスギ林が増加しています。

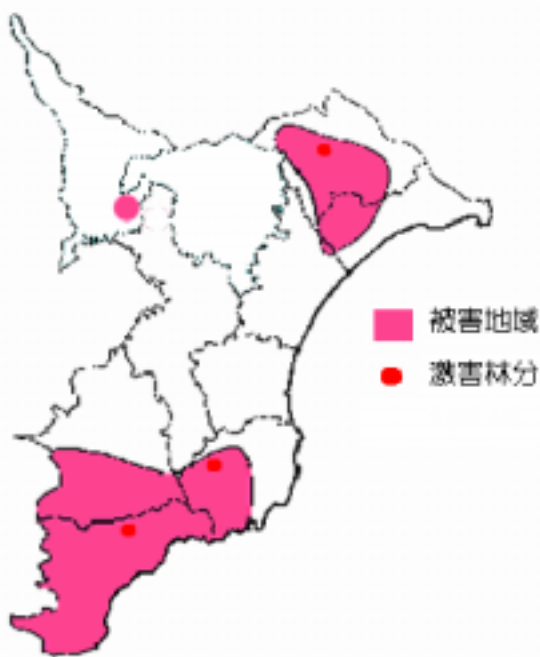
スギカミキリは、かつて日本海側の地域で多く発生し、その被害跡がささくれ立つことから「ハチカミ」と言われていました。千葉県においてもスギカミキリの被害が見られ(写真) 県南部に多く見られることが報告されました。

スギの生育とともにスギカミキリの被害が潜在的に増大していることが懸念されることから、全県における被害実態調査を実施しました。平成13年から17年の5か年間で地形図(5万分の1)を16等分して各区画のスギ林1か所について、被害の程度と被害率を調査したところ、

被害地域は過去に被害が多く確認されていた南部(安房郡の全域、夷隅郡と君津郡の一部)に加えて北部(香取郡、匝瑳郡の一部、船橋市)にも広く存在することが明らかとなりました(図)。

樹皮が粗く枝があばれるスギが成虫の発生源となり、その周辺に被害が見られるとされています。調査結果では、被害が認められているものの大半が微害(本数被害率10%以下)で、脱出孔(成虫が脱出した跡)が見られない被害木も多くあり、成虫の脱出孔が多く見られる羽化多発木はほとんど確認できませんでした。

良質のスギ材を生産していくためには、間伐を励行することが必要であり、その際にはスギカミキリ被害木を積極的に除去していただきたいと願っております。(主幹 石谷栄次)



被害地域



被害跡(樹幹)

南房総地域のマテバシイ林における帯状皆伐

1. 房総のマテバシイ林

千葉県の南房総地域には、マテバシイ林が 1,347 ha あるとされています。これらマテバシイ林は、明治後半から昭和前半にかけて、のりひびや薪炭材等として利用するために人家付近を中心に植栽されてきましたが、近年は多くが放置されている状況にあります。

マテバシイ一斉林では、葉が厚いという樹種の特徴から、うっ閉すると林内が暗くなって下層植生が貧弱になります。こうなると雨が降ったときに、土壌浸食が発生しやすくなります(写真 1)。土壌浸食を放置すると土壌浸透能が低下する等、森林の持つ水土保持機能が悪化する恐れがあります。

当センターでは、この対策として帯状皆伐による改善方法を検討しているところです。

2. 帯状皆伐とは?

帯状皆伐とは、文字どおり森林を帯状に伐採する方法です。この方法は、全面が裸地にならないため、皆伐と比較して伐採に伴う防災機能の低下を避けることができます。また、単木的に間引きするという方法より、伐採に必要な手間が少なく、林内の明るさが保てるという利点があると言われています。

今回、鴨川市の帯状皆伐試験地で試みた方法は、帯状に伐採する部分を等高線に沿って入れる水平帯状皆伐という方法です。等高線に沿って森林を残すため、枝条や落葉が帯状に堆積することで、土壌浸食を防ぐ効果が高くなるのではないかと考えました。

3. 帯状皆伐の効果検証

水平帯状皆伐を行ったマテバシイ林において、植生調査を実施しました。伐採 3 ヶ月後には、伐採帯は尾根付近を除いてベニバナポロギク等の草本群落が発達しました。また、さらに伐採 1 年 3 ヶ月後には、コセンダングサを主体とする草本群落とカラスザンショウ低木林群落が成立しました。マテバシイ等の萌芽枝にはシカの食害がみられるものがあったものの、短期間で草本植生が成立し、しかもその後部分的に低木林が成立するなど、伐採箇所の植生は短期間で回復しています。

土壌浸食防止には、落葉や植生等による土壌の被覆が重要な役割を担っており、特に急傾斜地では、落葉等の移動を抑制する植生が必要だと言われています。今回の帯状皆伐試験地でも、現在、土壌浸食状況について調査中で、土壌浸食防止の効果が確認されてきています。

(研究員 野原 咲枝)



写真 1 土壌浸食によるマテバシイ根系の露出



写真 2 伐採 1 年 3 ヶ月後の伐採箇所

森林研究センターの動き

組織改組

4月1日付けで環境機能研究室、森林活用研究室が統合され、以下の組織となる。

センター長

次 長

研究主幹

研究職員 8名 事務職員 1名 技能職員 6名(兼務1名含む) 上総試験地(嘱託職員 2名)

研究報告

千葉県森林研究センター研究報告第2号(2007.3)を発行した。

「研究論文」

- ・海岸保安林における湿地対策としての盛土工法の評価 クロマツ10年生の根系発達
- ・千葉県南部のマテバシイ林における山地保全を目的とした帯状皆伐の効果 - 伐採帯の初期の植生発達 -
- ・林分モデル試験用網室におけるマツノマダラカミキリ成虫の生存と行動
- ・天敵微生物培養不織布帯を使用したマツ枯死木に生息するマツノマダラカミキリ幼虫の駆除 - 航空機からの不織布帯投下及び不織布粉砕液散布の殺虫効果 -
- ・木質燃材を補助熱源とする簡易太陽熱利用木材乾燥施設におけるスギ材の乾燥 - 施設内の温度と含水率20%達成までの期間の関係 -

「解説・資料」

- ・サンブスギ林の現状と今後の管理
- ・木質燃材を補助熱源とする簡易太陽熱利用木材乾燥施設において平均含水率20%に達した製材品の品質 - 材内の含水率分布及び木口割れの出現割合 -

主な会議・行事(H19.1~5)

1 試験研究成果発表会

平成19年3月16日、当センター及びびさんぶの森文化ホールで開催された。

2 第1回試験研究評価委員会

平成19年4月20日、県庁多目的ホールで開催され、竹内センター長が出席した。

3 林業関係全体会議

平成19年4月25日、森林会館にて開催され、竹内センター長が出席した。

4 関東・中部林業試験研究機関連絡協議会

平成19年5月29日、都道府県会館にて開催され、竹内センター長が出席した。

雑 報

人事異動(3月31日付け)

室 長 中川茂子(退職)

上席研究員 松原 功(退職)

人事異動(4月1日付け)

研究主幹 石谷栄次(室長から)

副 主 幹 鈴木 潤(印旛地域整備センターから)

研 究 員 福原一成(中部林業事務所から)

副 主 幹 平山 忠(香取地域整備センターへ)

人事異動(6月1日付け)

主席研究員 岩澤 勝巳(昇任)

(編集責任 小平哲夫)